2021 年 7 月 21 日

練馬区長　　前川 燿男 殿
練馬区議会議長　かしわざき 強 殿

一般社団法人　日本建築学会関東支部
支部長　髙橋 徹

としまえん木馬の会事務所建物（旧「古城の食堂」）の保存活用に関する要望書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、昨夏に 90 年以上の歴史に幕を閉じた練馬区のとしまえん跡地については、東京都が「都市計画練馬城趾公園」として整備計画の検討を重ね、4 月 22 日に東京都公園審議会から答申が出されましたが、同地に遺されている、としまえん木馬の会事務所建物（旧「古城の食堂」、以下は「古城の食堂」と記す）については言及がなく、計画図にも描かれていません。本会が 3 月末に東京都に提出した「古城の食堂」の保存活用に関する要望書に対する回答に、答申に添付される資料の「都民意見及び対応方針」を引用して「意見を参考に検討」するとあるものの、依然として解体案が有力と推察されます。

豊島園は、都市郊外に発達した戦前の遊園地として我が国を代表する事例の一つです。商工業が著しく発達する近代社会では、都市に人口が流入することで、次第に環境の良い郊外が注目され、日本では明治末頃から私鉄の敷設を伴って行楽地や居住地として開発が促進されました。遊園地は、こうした一連の開発に先鞭を付けた存在で、郊外に居住する中流層を主な遊客にして、新しい時代の健全な都市文化を発信する場所（施設）として発達しました。日本ではいち早く都市化が進んだ大阪近郊で先行し、少女歌劇を擁する宝塚の施設が主導しますが、東京近郊では、豊島園をはじめ、田園調布の多摩川園や調布の京王閣多摩川原遊園が著名です。特に豊島園は、これを開いた実業家の藤田好三郎が郊外に遊ぶ意味を重視したことを反映して、園芸や体育、風致の維持を軸に設計されており、一つの典型と捉えられます。「古城の食堂」は、こうした豊島園の理念に則って設計され、遅くとも本開園した 1927（昭和 2）年には建設されています。加えて、長引くデフレの影響で、戦前から続く老舗遊園地が次々と閉園に追い込まれている現況において、建設当時の様子をよく留めるこの建物は、郊外の開発や遊園地の歴史を証言する貴重な遺構と言えます。

また、豊島園の設計は、造園を欧米で学び、邦人初のランドスケープ・アーキテクトとして活躍した戸野琢磨（1891- 1985）によるものですが、当該の建物も戸野が関わって遊園地の造園と一体的に設計されたと考えられます。戸野はその後、国内外に多数の庭園を設計し、著名な建築家との協働も少なくありませんが、豊島園は戸野による国内での実施処女作であり、「古城の食堂」は、戸野が直接的に建築に関与したと考えられる数少ない事例として価値があります。

そして、この建物が立地する場所は、練馬城趾の遺構に至近ですが、戸野は、それを保全するに相応しい方法として、英国式の花園を設け、その添景となるように、英国の古城を模したこの建物を設けたとしています。即ち、その当時、歴史的風致を守ろうとした藤田や戸野らの意志を象徴する遺構と言えます。都の整備計画でも、遊園地時代を含めて土地の歴史性を継承することが重視されていますが、その主旨を実現する上でも、不可欠な存在です。練馬区民や東京都民に長年に亘って親しまれてきた場所の記憶を繋ぐ上でも同様と言えます。

構造は、当時の最新技術として関東大震災後に普及した鉄筋コンクリート造と見られます。英国風の古城を模しながらも、陸屋根や片持ち梁といった、この構造の特徴をよく示す手法を巧みに採り入れた設計であり、近代建築の事例としても希有な存在です。

こうした由緒や建築的特徴に基づく歴史的価値を有する「古城の食堂」の遺構を保存・活用することができれば、新しい公園における歴史性の継承に大きく貢献するだけでは無く、練馬区や東京都、さらには我が国の文化遺産の保存においても有意義と考えられます。

つきましては、地元の自治体である貴下におかれましては、この建築の持つ歴史的・文化的な価値について改めてご理解いただき、「古城の食堂」の保存活用、そのために必要と考えられる専門的な現況調査について、新しい公園計画の実行主体である東京都に働きかけていただけますよう、お願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的並びに技術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具